



特別審査委員賞 [高校生の部]

多数決から見た世界

名古屋市立菊里高等学校 1年

柚山 高摩 ゆやま たくま

何より「多数決」という課題設定のユニークさが際立っていました。十分な議論や少数意見を尊重することの大切さ、多数決を正しく行う方法の提言には説得力がありました。文章力や自らの言葉でしっかり論を進めている点も高い評価につながりました。

些細な願い

多数決。それは、ある集団において意思決定を図る際に、多数派の意見を採用する方法のことである。現在日本では、年齢や事の大小に関係なく、多数決は広く使われている。それは多数決という方法は単純明快で、誰にでも容易に理解できて、さらに時間もかからないなどといった利点があるからだ。しかし、少数意見が抑圧されたり、その場の空気に流されたりする人がいたり、問題点も少なくない。

しかし、ここでは多数決の正当性を論点にはしない。それについては多くの人が議論してきた上に、多数決がたとえ間違っているとしても、この多数決に染まりきった世界を変えることなどもはや不可能だからだ。

この論文では、ひとまず、多数決の正当性はあるものとする。その上で、どう多数決と向き合っていくかを論点にしたい。僕は僕なりにその向き合い方を見つめ直し、僕から見える、限りなく小さい世界に対する改善案を綴っていく。それは「新たな挑戦」と呼べるほどのものではないかもしれない。ただ僕は、この論文に、これを読んだ誰かの意識が少しでも変われば、という些細な願いを込めているのである。

普遍的に正しい常識

僕ら人間は一般的に母体から産まれる。そして産まれたその時、初めて世界に触れる。そこで五感から得られる情報をもとに、脳の中で世界の地図を作っていく。例を挙げよう。人を殺してはいけないということは、現代の日本人ならそれが常識で当たり前だと言うだろう。しかし、産まれたのが例えば戦国時代だったならば、僕らは現代の常識を常識と認識することができたのだろうか。むしろその真逆の事象を、産まれた時代のその世界に触れることで、常識だと認識するかもしれない。

要するに、産まれた時代や環境によって、人は知らず知らずのうちに、それが「普遍的に正しい常識」だと認識してしまうということだ。それはつまり、今日誰にも賛同されないような考えが、何世紀後かには常識になるかもしれないという可能性を秘めていることにもなる。

産まれくる今の子供たちは、多数決という方式が正しいものだと思わず疑わない。それは育つ過程、例えば小学校で、多数決というものを自然に先生などが取り入れるからだ。それが世界のルールなのだと思えていくからだ。果たしてその「盲信」が後に、どのような結果を招くのだろうか。

全員一致の合意

ここで、近世のフランスで活躍した哲学者を紹介する。ジャン=ジャック・ルソー。社会契約論を説いて、「全員一致の合意」を目指した人物として知られている。しかし、彼は決して多数決を否定しているわけではない。彼は、全員一致のルールの中で多数決の方式を認めると取り決めておけば、その後の決定は多数決でも構わないと考えている。

これが正しいとするなら、また、これを多数決を正当化する過程の一つだとするならば、僕らはその過程を省いてしまっただろうか。今さら国民全員に「多数決を使ってもいいですか」と聞くことなどできやしないだろうが、学級で決め事をする時などでは、この全員一致の合意をとる過程は踏むべきだと思う。それも、子供たちが「盲信」し始めるより前に。なぜなら、僕らが小学生の時に、先生が多数決の説明をした後、「いま説明した多数決というやり方で決めてもいいですか」と聞いてくれたら、他の選択肢を与えられたことにより、より良い採決の方法を考えようとしたかもしれないからだ。少なくとも、多数決が「普遍的に正しい常識」だとまで認識することはなかっただろう。

盲信の恐怖

では、なぜ「盲信」するのが悪いのか。この問いについて説明していこう。結論から言うと、多数決を正当化する過程を省かないようにするためである。これは先述した「全員一致の合意」とはまた別である。今回取り扱うのは、「十分な議論と少数意見の尊重」である。国会の議論がどのように行われているかは定かではないが、定かにする必要性もない。問題にしているのは、はじめに記したように、僕が見てきたちっぽけな世界である。その世界の中では、十分な議論もなされぬまま、少数意見を聞くこともないまま、多数決が強行されることが多々あった。しかもそれをほとんどの人が、さも普通の光景であるかのように見ていた。これら全ての原因が、他にもない「盲信」にあると僕は考える。

ここでは多数決は正しいとしたが、それは正当化する過程をきちんと踏まなければ成り立たない。しかし、多数決を「盲信」する子供たちの中で、いつしか「多数派の意見だから正しい」と思い込んでしまう人が現れてしまうのだ。そのために、「十分な議論」もしないまま、何が多数派かを知るための多数決が行われてしまう。また、「多数派の意見だから正しい」という思い込みは、裏を返せば「少数派の意見だから間違っている」とも取れる。その意識を持つと、「少数意見の尊重」という多数決を正当化する過程が省かれてしまいやすい。「十分な議論と少数意見の尊重」という2つの過程がどちらも欠落してしまえば、多数決などただの人気投票になってしまうのだ。これらはまさに「盲信」の恐怖と言えるだろう。

多数決の正当化

以上を踏まえた上で僕が提案するのは、多数決を正しく使うための方法である。

まず、議題について多数決をいきなり採る。ここでは、既に議題に対する選択肢が設けられているものとする。いきなり多数決を採ることにより、まずは自分自身で考えることができる上に、他人の意見を聞かないことで場の空気に流されるリスクを減らすことができる。それから議論を始めていく。ここで設けられた選択肢を、仮にA案、B案、C案の3つとする。そして、最初の多数決では、A案、B案、C案の順に多く票を集めたものとする。議論の進め方は次の通りである。少数派となったB案、C案に票を入れた人たちに、A案の問題点を指摘してもらおう。そして、A案に票を入れた人は、それに対する解決案を考え、説明する。これを繰り返すと、より中身が具体的になったA案を生み出せる可能性もあれば、A案は問題だらけだと気付ける可能性もある。そして、再び多数決を採る。もし議論によりA案が良い案ではないと分かり、B案やC案が多数派になれば、ま

た同様に議論をしていくと確実に最善案が導き出せるだろう。以上が、僕が考えた多数決の正しい使い方である。

おわりに

そもそも、僕が考えた改善案は、多数派も少数派もひとりひとりが議題について積極的に、そして論理的に考えなければ成立しない。そのように考える機会を、僕らは十分に与えられていないかもしれない。しかし、僕らはそれを待っているだけなのだろうか。いや違う。この日常の中にも「なぜ?」という疑問は溢れている。論理的思考力を身に付けるために、僕らはそれらの際限のない自問を自答し続けるべきなのだ。そして、「正しさ」を追求するために、思考の放棄だけは絶対にしてはいけない。

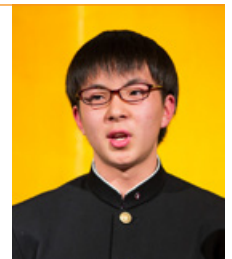
これはあくまで僕らのちっぽけな世界での話であり、国会や社会を直接的に変えるものではない。しかし、これからの国や社会を担っていくのは僕らの世代であり、今、僕らの意識が変われば、近い将来の、そしてさらに次の世代以降の大きな世界を変えることにつながるのではないだろうか。その可能性を信じて、僕はこの論文を「新たな挑戦」と呼ぶ。

参考文献

- ・ 知の快楽 哲学の森に遊ぶ「一般意思論は全体主義か?:ルソーの社会契約論」
<http://philosophy.hix05.com/Rousseau/rousseau04.volonte.html>
- ・ ウィキペディア フリー百科事典「多数決」
<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%A4%9A%E6%95%B0%E6%B1%BA>

【受賞者インタビュー】

自分の考えを整理して
書いた論文が
人から評価されてうれしい



—— コンテストに応募した理由、きっかけは？

夏休みの課題だからという理由もありましたが、日頃思っている考えを整理したかったからというのも大きな理由です。

—— この論文を書き上げるまでに、どのくらいの時間がかかりましたか？

構想を頭の中でぼんやりと描いてから書き上げるまで、2日かかりました。

—— この論文を書く上で苦労したことはありますか？

「反対意見を想定して、それに対する考えを書く」ということは大事だと思うのですが、やり過ぎてもきりがなく、字数も足りないの、どこまで突き詰めて書くかという点にすぐ苦労しました。

—— この論文を書いたことで良かったことはありますか？

2つあります。1つは漠然とした自分の意見を整理できたことです。もう1つは自分の考えが誰かに評価されたことです。賛否両論だと思いますが、自分の論文、意見をたくさんの人に知ってほしいです。